

新闻摘要

にゅーすきじ ニュース記事から (2023年12月1日~2024年5月31日) にち

有关遗华日本人等、中国・库页岛归国者的新闻

ちゅうごくざんりゅうほうじんとう ちゅうごく・さ はりん きこくしゃかんれん にゅーす 中国残留邦人等、中国・サハリン帰国者関連のニュース



12月5日(周二)

现年 86 岁的樋口诚先生是在二战期间作为长野县前富士见村(现富士见町)的分村移民前往满洲(现中国东北部)的,他将当时的照片捐献给了满蒙开拓和平纪念馆(该县阿智村)。他说:“我年事已高,决定把这些照片捐献给纪念馆,让它得到充分的利用”。樋口先生多年来把先前“富士见分村开拓团”成员保存下来的照片进行了近拍,打印和汇编。

12月6日(周三)

家住京都府的黒田雅夫先生(86岁)出版了一本图画书《活在当下》,书中描绘了在满洲的艰苦经历。15年来黒田先生一直在小学和中学向学生们讲述战争经历。他试图把战争的悲剧绝不能重演告诉给更多的人,于是就黒田先生大约从15年前就开始



12月5日(火)

だいにじせかいたいせんちゅう ながのけん きゅうふじみむら げん 第2次世界大戦中に長野県・旧富士見村(现富士见町)の分村移民として旧满洲(现中国東北部)へ渡った樋口誠さん(86)が、当時の写真を満蒙开拓平和纪念馆(同県阿智村)に寄贈した。

「高齢でもあり、適切に活用してもらえよう、纪念馆への寄贈を決めた」という。樋口さんは、元「富士見分村开拓团」関係者らが保管していた写真を接写、印刷し、まとめてきた。

12月6日(水)

きょうとふ くらだまさお かこく たいけん 京都府の黒田雅夫さん(86)が満洲の過酷な体験をまとめた絵本『今を生きる』を刊行した。黒田さんは約15年前から小中学校などで戦争体験の語り部をしている。「戦争は二度と繰り返してはならないことをどうにか伝えられないか」と考え、絵本制作を思い立ったという。周囲の助言で資金をクラウドファンディングで募り、1000冊が完成した。

在小学和中学从事战争经历讲述人的活动，他一直想着“能不能把战争绝不能重演传达给世人呢”，于是就萌生了制作这本图画书的想法。在周围人的建议下，他通过大众筹资，完成了 1000 册。

12月16日(周六)

長野県飯田市日中友好協会举行了一次交流会，居住在飯田下伊那地区的中国帰国者 2 代和 3 代与会员及当地居民首次进行了交谈，共有 40 余人参加。2 代和 3 代讲述了他们面对语言障碍举步维艰、周围人是如何友善对待自己的经历，以及他们对晚年生活的担忧。该协会一直在帰国者 1 代提供支援，称在成立 60 周年之际举办这次交流会，旨在帮助 2 代和 3 代排忧解难以及促进与当地居民的沟通与交流。

1月12日(周五)

《毎日新聞》刊登了一篇对中島茂先生(89 岁)的采访报道。他小时候与家人一起从長野县作为开拓团成员前往满洲。中島先生和母亲在二战结束时的混乱中逃难，后来被一个中国家庭收留，并于 1953 年返回日本。至今他仍在从事讲述人的活动。

2月5日(周一)

《毎日新聞》刊登了一篇对梁宝璋先生(60 岁)的采访报道。梁先生是遗华孤儿 2 代，现今是一名经营号称“正宗中餐馆”的老板。他来自齐齐哈尔市(黑龙江省)，在东京拥有五家中国东北菜馆。每家都人气爆满。

2月10日(周六)

2月10日，在長野県飯田市举办了一项题为“告知自己是‘遗华日本人 3 代或 4 代’——其含义和意义何在”的活动。在日本出生长大的遗华日本人 3 代、4 代走上讲台，讲述了各自的亲身经历，同时谈到了如何面对自身的出身血统・中国根的复杂内心世界。

12月16日(土)

長野県の飯田市日中友好協会は、飯田下伊那地域に暮らす中国帰国者 2・3 世代たちと会員や地域住民らが語り合う初めての交流会を開き、40 人余りが参加した。2・3 世からは、言葉の壁に苦労したり周りの人に親切にされたりした経験や、老後への不安などが語られた。これまで帰国者 1 世の支援を行ってきた同協会は、設立 60 周年の節目に当たり、2・3 世の悩み解決や地域住民との交流促進を図ろうと交流会を開いたという。

1月12日(金)

『毎日新聞』は、幼少時に一家で開拓団として長野県から旧満洲へ渡った中島茂さん(89)へのインタビュー記事を掲載した。中島さんは終戦時の混乱の中で逃避行の後、中国人の家に母親と二人で引き取られた経験を持ち、1953 年に帰国を果たした。今も語り部としての活動を続けている。

2月5日(月)

『毎日新聞』は、中国残留孤児 2 世で、いわゆる「ガチ中華」の料理店を経営する味坊のオーナー、梁宝璋さん(60)の取材記事を掲載した。梁さんはちちハル市(黒竜江省)の出身で、都内 5 か所で中国東北料理の店を展開している。いずれも人気店だ。



2月10日(土)

「中国残留邦人『三世・四世』と名乗るといふこと—その意味と意義を問う—」が 10 日、長野県飯田市で開催された。日本で生まれ育った中国残留邦人 3 世、4 世が登壇し、それぞれに自身の体験を踏まえながら、中国ルーツと向き合い続けてきた複雑な内面に言及した。

2月25日(日)

中国残留邦人 3 世で小学校教諭の広野夏帆さん(29)が広島市で講演し、20 人の参加者が広野さんの話に耳を傾けた。父は 1986 年、高校生の時に

2月25日(周日)

遺華日本人3代、小学教師廣野夏帆(29歳)在廣島市做了一场讲演,20名与会者聆听了她的讲话。1986年,她父亲还是个高中生,就随遺華孤儿的母亲(她的祖母)举家回到了日本,但却因找不到稳定的工作而吃了不少苦头。廣野老师说,“起初刚当上教师的那段时间,我不敢说出自己的身世,担心学生和家长会怎么看待自己。”

3月4日(周一)

在回国定居的遺華孤儿当中,随着老龄化的加剧,对护理支援的需求日益增加,但由于语言沟通不畅,在护理设施里也往往处于孤立状态。《读卖新闻》采访了居住在东京江戸川区的K先生(84岁)、名古屋市的S先生以及提供中文服务的日间服务机构“一笑苑”,报道了遺華孤儿1代当下的所思所想。

3月20日(周三)

坐落在长野县阿智村的滿蒙开拓和平纪念馆宣布,由于战争经历讲述人的减少,从4月起,将以往通常每月两次的讲述人定期演讲会减少为每月一次。当初曾有30多位讲述人,但因一些人已经去世或年事已高而难以再继续讲下去,今年预计所剩人数不到10位。以往讲述人演讲会分别在第2和第4个星期六举行,现在改成只在第2个星期六举行,准备在第4个星期六播放视频或安排一些其他活动。

4月6日(周六)

卷口清美女士(58岁)是遺華日本人3代,她作为有关遺華日本人经历的讲述人在群馬县前橋市做了一次演讲,讲述了她祖母的经历。本次演讲会是由群馬滿蒙开拓历史研究会(会长东宮春生)主办的。卷口女士出生于中国黑龙江省,16岁时来到日本。她的祖母是一名遺華日本妇女,1942年作为开拓团成员随家人前往前滿洲,可后来丈夫被征召入伍,导致夫妻分离失散,战争刚结束时又带着孩子们到处逃难,为了

中国殘留孤兒の祖母とともに一家で帰国したが、なかなか安定した仕事に就けず苦勞したという。廣野さんは教員になった当初、「子どもや保護者にどう捉えられるか不安で、自分のルーツを話せなかった」と話した。

3月4日(月)

日本に永住帰国した中国殘留孤兒の間では高齢化が進み、介護支援の必要性が高まっているが、日本語が不自由なために介護施設でも孤立しがちである。『読売新聞』は東京都江戸川区に暮らすKさん(84)や名古屋市のSさん、中国語対応可能なデイサービス施設「一笑苑」などに取材し、殘留孤兒1世代の今の思いを伝えた。



3月20日(水)

長野県阿智村の滿蒙开拓平和記念館は、体験の語り手の減少により、昨年まで基本的に月2回開いてきた語り部定期講演会を4月以降は月1回に減らすと発表した。語り部は当初30人余りいたが、他界した人や高齢で語りが難しくなった人もおり、今年は10人未滿の見込みという。従来は第2・第4土曜日に開催していたが、語り部講演会は第2土曜のみとなり、第4土曜は映像上映などの企画を考えていくとしている。

4月6日(土)

中国殘留邦人3世で、中国殘留邦人に関する語り部として祖母の経験を語り継ぐ巻口清美さん(58)の講演が群馬県前橋市で開かれた。講演会は群馬滿蒙开拓历史研究会(東宮春生代表)の主催によるもの。巻口さんは中国黒竜江省で生まれ、16歳の時に来日した。中国殘留婦人の祖母は1942年に开拓団の一員として一家で旧滿洲へ移ったが、夫が召集され、夫婦離れ離れになった後、終戦直後の逃避行を経て、子どもたちと生きのびるために中国人男性の妻になったという。語り部派遣活動は、首都圏中国帰国者支援・交流センター(東京都台東区)が行っている。

能与孩子们一起活下去，她成了一名中国男子的妻子。讲述人派遣工作由首都圏中国帰国者支援・交流中心（東京都台東区）负责安排。

4月14日（周日）

14日，中国哈尔滨市的民间组织“哈尔滨养父母联络会”的7名成员时隔6年到访位于阿智村的“满蒙开拓和平纪念馆”，并与居住在饭田下伊那地区的原遗华孤儿及其家属畅谈，加深了彼此间的交流。该联络会一直在为抚养战后遗留在前满洲的日本孤儿的中国养父母提供支援。参加此次活动的原遗华孤儿多田清司先生（85岁）用中文回顾了自己当时的生活，并表达了对养父母的感激之情。



4月21日（周日）

21日，在长野县佐久市岩村田公园里的“满洲开拓团慰灵碑”及其它纪念碑前举行了阵亡者追悼仪式。这一活动是由因战争而失去亲人的遗属协会等共同组织的，包括当地区长在内的26人参加了此次活动。遗属协会的一位代表回顾了派遣移民的历史，说道：“在长野县有许多人满腔热忱地投身于满洲的开发建设却丧失了宝贵的生命”，并表示“将悼念活动继续下去有着极其重大的现实意义。现在世界局势正处于不稳定状态，更希望为了和平将活动持续开展下去。”

4月25日（周四）

位于阿智村的满蒙开拓团和平纪念馆，已将从日本全国各地前往前满洲的1025个开拓团和满蒙开拓青少年志愿军的名称、定居地区和注册人数等数据数字化，并公布在该馆的网站上。在列表中，将开拓团名称等19个项目汇总在一个电子表格（Excel）文件中，还可输入关键词进行搜索和排序。

5月6日（周一）

在三重县名张市举办了一次摄影展（5月3日至6日），展示了1980年代遗华日本孤儿为寻亲来到日本时所呈现出来的各种不同的面貌和表情。这些图片是由居住该市的羽马干生先生

4月14日（日）

中国ハルビン市の民間団体「ハルビン養父母連絡会」の7人が14日、阿智村の満蒙開拓平和記念館を6年ぶりに訪れ、飯田下伊那地域在住の元中国残留孤児やその家族たちと交流を深めた。同連絡会は、戦後旧満洲に残された日本人孤児を育てた中国人養父母らの支援を行ってきた。参加した元残留孤児の多田清司さん（85）は中国語で当時の生活ぶりを振り返り、中国の養父母らへの感謝の念を表明した。

4月21日（日）

長野県佐久市の岩村田公園では21日、「満洲开拓団慰霊碑」などの前で戦没者慰霊祭が行われた。戦争で親族を亡くした地元の遺族会などが主催したもので、地元区長をはじめ26人が参加した。遺族会代表は「長野県では特に熱心に満蒙開拓を進めて多くの方が犠牲になった」と移民送り出しの歴史を振り返り、「慰霊祭は続けていくことに意義がある。世界情勢が不安定な今こそ平和のために活動を続けたい」と話した。

4月25日（木）

阿智村の満蒙開拓平和記念館は、全国各地から旧満洲へ渡った1025の開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍などの名称や入植地域、在籍人数などのデータをデジタル化し、同館のウェブサイトにて公開した。一覧表では団名など19項目がエクセルファイルにまとめられており、キーワード検索や並べ替えも可能という。

5月6日（月）

中国残留孤児らが1980年代に肉親捜しで来日した時の様々な姿や表情をとらえた写真展が、三重県名張市で開催された（3～6日）。撮影したのは同市在住の羽馬幹生さん（81）。羽馬さんは肉親捜しの訪日調査が始まった1981年から88年まで計17回、当時国の依頼を受けた報道写真家の浜口夕花シさんに同行し、中国残留孤児が関西を訪れた時の

(81 岁) 拍摄的。羽马先生从 1981 年寻亲访日调查工作开始到 1988 年, 共计 17 次, 随同当时受政府委托的新闻摄影师滨口隆先生, 拍摄了遗华孤儿到关西地区访问时的照片。

5 月 10 日 (周五)

9 日, 长野市筱之井市历史编辑委员会举办了一次以战争期间的"满蒙开拓"为主题的讲座。约 100 名当地居民聆听了县立历史博物馆(千曲市)名誉研究员青木隆之(66 岁, 居住在饭田市)的讲座。在筱之井地区, 也有很多遗华日本孤儿在日中恢复外交关系后回到了日本, 此次讲座旨在加深对其历史背景的了解。

5 月 12 日 (周日)

为遗留在"桦太"(现俄罗斯库页岛(萨哈林岛))的日本人回国和生活提供支援的非营利组织"日本库页岛协会"(东京), 于 12 日在札幌市东区召开了一次全体大会和交流会。斋藤弘美会长(67 岁)表示:"希望打造一个让那些根在库页岛的人们都能成为一家人的地方, 不论他们属于哪个国家"。他还介绍了至今仍遗留在萨哈林岛的同胞发来的视频。

5 月 18 日 (周六)

17 日, "弥荣会"在东京召开了一次全体大会。1932 年"满洲国"成立时, 来自长野县等 11 个县的 493 人作为第一批满蒙开拓团前往满洲。"弥荣会"就是由弥荣村开拓团的原成员和遗属组成的。该团体持续了长达半个多世纪的活动从此落下了帷幕。据称原因是会员的老龄化。来自北海道、秋田、新泻等全国各地的 20 名会员前往慰灵碑所在的本龙寺(台东区), 并举行了最后一次法事。会长前岛进先生(88 岁)表示:"虽很令人遗憾, 但我希望弥荣村能够作为一个历史记录保留下来, 为下一代提供借鉴。"

写真を撮影していた。

5 月 10 日 (金)

長野市の篠ノ井市誌編纂委員会は 9 日、戦時下の満蒙开拓をテーマとする講座を開いた。地元の住民ら約 100 人が県立歴史館(千曲市)名誉学芸員の青木隆幸さん(66、飯田市在住)の講演に耳を傾けた。篠ノ井地区には日中国交正常化後に帰国した中国残留邦人も多く、その歴史的背景に理解を深めようと、同講座が企画された。

5 月 12 日 (日)

樺太(現ロシア・サハリン)残留邦人の帰国や生活を支援する NPO 法人「日本サハリン協会」(東京)の総会と交流会が 12 日、札幌市東区で開かれた。斎藤弘美会長(67)が「サハリンにルーツを持つ人が、国に関係なく一つの家族となれるような場になりたい」と述べ、サハリン残留者からのビデオメッセージも紹介された。

5 月 18 日 (土)

「満洲国」建国の 1932 年に最初の満蒙开拓団として、長野など全国 11 県から 493 人が満洲に渡った弥栄村开拓団の元団員と遺族らでつくる「弥栄会」は 17 日、東京都内で総会を開き、半世紀余りにわたる活動に幕を閉じた。会員の高齢化が理由という。北海道や秋田、新潟など全国から会員 20 人が慰霊碑のある本龍寺(台东区)を訪れ、最後の法要が営まれた。会長の前島進さん(88)は「残念だが、弥栄村が記録として残り、次世代への教訓となることを期待したい」と話した。



◆ご注意: 本欄の内容は、一般の新聞などで報道された内容を中心に要約して掲載しています。したがって、政府が公式に発表したものではなく、一部には報道機関の観測記事なども含まれています。

◆ 请注意: 本栏目的新闻为见诸报端的报道摘要, 并非政府正式公布的内容, 其中一部分还包含媒体的观察消息。